

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 19 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370360

研究課題名(和文) 西洋古典文学における「引喩適合」の実証的究明に基づく作品論研究

研究課題名(英文) Studies on the Classical Literary Works on the basis of 'allusive appropriation'

研究代表者

大芝 芳弘 (Oshiba, Yoshihiro)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：70185247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：西洋古典文学では、ジャンルの伝統と革新の問題の解明がその最重要課題の一つだが、文学的伝統を受け継ぎつつそこに新たな創造的革新の手を加える方法の一つに、「引喩適合法」と呼ぶべき方法がある。先行作品の一節をそれを示唆する引喩(allusion)によって新たな文脈に適合させることで独自の作品に活かすという手法である。本研究はこの観点から具体的な古典文学作品を実証的に究明し、ジャンルの伝統と作品の独創性の様相を明らかにすることを目指した。その検討と考察の作業を通じて、「引喩適合」という手法が具体的な形で実践されていることを一定の確実性をもって捉えることができたと考えている。

研究成果の概要(英文)：Our research-project aimed at investigating various works of Greek and Latin literature from the point of view of literary tradition and innovation with the help of the theory of 'allusive appropriation', which is recently debated among European scholars of ancient literature. According to this theory, literary works make some allusion(s) to certain elements of their preceding work(s) and thus adapt or appropriate them for its own creative purposes (including, perhaps, some cases in which the author was not necessarily conscious of the process). We tried to elucidate how such allusive interaction functions in various classical works for their own creative innovation by investigating carefully not only their formal or stylistic features but also their thematic aspects. Through these investigations and critical analyses on individual works we can confirm that such allusive procedure is certainly shown to fulfill its function in some literary works of classical literature.

研究分野：西洋古典学

キーワード：引喩 伝統 文体 ジャンル

1. 研究開始当初の背景

本研究組織を構成する両名の研究者、研究代表者の大芝芳弘と研究分担者の小池登は、以前から大芝が東京大学の非常勤講師として、小池が首都大学東京の非常勤講師としてそれぞれ出講するなど、西洋古典学研究者としてともに共通の関心と研究手法を持ち、相互の大学の研究と教育を互いに担い合う仲間として連携して来た。また、大芝が首都大学東京において科学研究費補助金による研究として継続して遂行して来た一連の研究課題の研究分担者として小池を迎え、さらに2013年度からは首都大学東京における同僚として迎えたことは、研究遂行上も大きなプラスとなった。上述の一連の研究とは、基本的に西洋古典文学における伝統と革新、模倣と独創の問題を主たる関心として行われて来た研究であった。即ち、西洋古典文学作品をその形式と内容の両面にわたる様々な角度から実証的に検討・考察することにより、西洋古典文学における伝統の根強さと、それと同時に、作者がその伝統に対して多様な工夫を凝らして新たな作品を作り出して行く革新性と創造性の機微を捉えることに努めて来た。この問題は同時に欧米における古典文学研究においても盛んに議論され研究が積み重ねられて来ている課題であり、我が国においても同様の研究が進められて来た。都立大学の時代から首都大学東京になって以降も大芝が中心となって継続的に遂行して来た科研費の研究課題としては、「西洋古典文学における叙事文芸様式の伝統と変貌(基盤研究C(2)平成7-8(1995-1996)年度)」、「ギリシア・ローマ文学における叙述技法の解明を基礎とする作品論研究(基盤研究C(2)平成10-12(1998-2000)年度)」、「西洋古典文学の諸文芸様式における文体論的特徴の解明を基礎とする作品論研究(基盤研究C(2)平成13-15(2001-2003)年度)」、「西洋古典文学における間テキスト解釈理論に基づく実証的作品論研究(基盤研究(C)平成17-19(2005-2007)年度)」、「西洋古典文学における「創造的模倣」の実証的解明を基礎とする作品論研究(基盤研究(C)平成20-22(2008-2010)年度)」、「西洋古典文学における「ジャンル混交論」を基軸とした実証的作品論研究(基盤研究(C)平成23-25(2011-2013)年度)などがある。本研究はこれら一連の研究の成果の上に立ち、さらに近年の欧米における研究動向においてもいっそう注目されて来た観点を加味した視点から、上述のような西洋古典文学における伝統と革新の問題を、先行作品に対する「引喩」的な関連づけによって自らの作品にその諸要素を適合させることによる伝統の受容と改新という創造的な営みに特に焦点を当て、それを具体的な作品に即して実証的に解明しようと企図したものである。

2. 研究の目的

西洋古典文学研究においては、各文芸ジャンルの伝統と革新の問題の解明がその最重要課題の一つだと言っても過言ではない。文学的伝統を受け継ぎつつ同時にそこに新たな創造的革新の手を加える方法の一つに、「引喩適合法」と呼ぶべき方法がある。先行作品の一節を示唆する引喩(allusion)を用いながらそれを新たな文脈に適合させることで独自の作品に活かすという手法である。本研究はこの観点から古代ギリシア・ローマの古典文学作品を実証的に究明することで、各々の作品の持つ独創性と、その基盤となるジャンルの伝統とその変容の様相を明らかにすることを目指した。

西洋古典文学とりわけ韻文作品においては、先行する作品を踏まえつつ新たな作品を創造するということが、作品創作上の基本的な原理として実践されていた。具体的には、多くの場合、それぞれのジャンル(genre: 文芸様式)ごとの規範ないし約束事を受け継ぎつつ新たな作品を創造するという営み、即ち、ジャンルの伝統と革新が様々な次元で観察できる。ジャンルの規範とは、韻文作品ならばまずジャンルごとに特定の韻律を用いること、さらには措辞・語法、作品の規模と構成などの形式的・文体的要素と、主題やモチーフ、トポス、調子や語り口などの内容的・題材的要素の点での伝統を守ることである。さてそうした古代的な創作状況を前提にした上で、本研究が題目に掲げる「引喩適法」とは、引喩(allusion)という修辞学的手法に基づいて先行作品に含まれる要素を様々な仕方で暗示することで自らの作品に適合させる形で取り込む(appropriate/adapt)という方法であり、ある作品が先行作品を何らかの形で踏まえるか影響・作用を受けていると見なしうる限りにおいて当該テキストが先行テキストへの何らかのallusionを含んでいると捉え、しかし同時に当該作品自体の個性つまり上述の形式的・文体的要素(措辞・語法、規模と構成など)と内容的・題材的要素(主題やモチーフ、トポス、調子や語り口など)要するに当該作品をその作品たらしめている独自性に、とりわけ作品全体としての構想や統一性に、そうしたallusionがいかに適合されて寄与しているかを究明しようとする観点である。従って本研究課題は、新たな作品創造に際して先行作品を踏まえるという西洋古典文学においては暗黙の前提であった創作原理を、allusionというある意味で文学的創造行為においては必然的とも言える修辞学的手法に着目しつつ実際の作品に即して実証的に究明しようとした。その意味で、本研究は本研究組織がこれまで遂行して来た研究を継承発展させ、伝統と革新の問題をより普遍的な原理に関わる観点から実証的に究明することを目指したものである。

3. 研究の方法

全体的な計画としては、まず本研究に関連する先行諸研究の調査と、現代の文芸理論における「引喩適合」の概観を行い、この方法の一般的な働きについての理解を深め、次に allusion と見なしうる要素を含む作品とその先行作品との比較が可能なテキストの選定とそれに関する文献学的基礎作業を行い、また措辞・語法、修辞技法や文体論的特徴、また作品の主題やモチーフ、トポス等の特徴などの観察を行うこととした。具体的な検討作業においては、当該作品のテキストに即して「引喩適合」の様相を明らかにするために、allusion と見なしうる要素が先行作品と当該作品の各々の全体の中でいかに効果的に機能しているかに特に着目しつつ、内容と形式上の様々な観点からの比較検討を行った。この作業は原則として研究代表者と分担者が各々単独で行い、随時相互の研究の成果を報告し合い、批評と討議を経て最終的には論文にまとめて公表することに努めた。

具体的には、まずは本研究に関連する先行諸研究の調査と概観と、「引喩適合」とその基礎をなす修辞学理論など文学創作の手法や原理に関わる文芸論上の諸著作の概観を行い、間テキスト解釈理論や創造的模倣論、ジャンル混交論を始めとする現代の文芸理論についても確認し、これと並行して、伝統と革新の様相が最も顕著に現れる措辞・語法(言語使用域 register の問題を含む) 修辞技法と文体論的特徴や主題、モチーフ、トポス等についても先行研究の成果に基づき、ギリシア・ローマ文学の各種文芸ジャンルとの関連に着目しつつ概観した。次いで「引喩適合」の実例として検討すべき作品の選定を行った。続いて、当該テキストに関する可能な限り綿密・着実な読解を行った。原典読解の際の具体的な作業としては、可能な限り文献学的にも厳密な読解に努めつつ、当該テキストと関連する類似箇所、並行例、そしてまさに引喩適合の事例に該当すると考えられる作品や部分に関しては、それらの関連箇所についても同様の読解作業を綿密に進めた。その際には、単に部分的関連の確認に留まらず、関連箇所を含む作品全体との比較検討を行うことで、当該作品が先行作品のどのような要素への引喩を行い、また自らの作品にそれをどのように活かしているのかというその創造的工夫を作品全体との関連において考察した。具体的な対象作品は演習授業で扱った作品とも重なるので、例えば小池はソポクレスとエウリーピデースの悲劇、プリニウスの書簡、大芝はプラトーン『国家』とウエルギリウス『アエネーイス』、キ

ケローの哲学書なども取り上げたが、特に小池はプルータルコス、サルスティウスの歴史小品とアイスキュロス悲劇、大芝はルクレティウス、プロペルティウスとホラーティウス『カルミナ』の検討と考察に力を傾注した。

4. 研究成果

上述のような研究目的と計画・方法のもと、具体的な作業としては、当該テキストが先行する作品の諸要素のうち、措辞・語法、修辞技法など文体論的な要素や、モチーフ、トポス、構成など内容的な要素を、いかに allusion と呼ぶべき仕方ですらの作品に取り込み活かしているか、単に部分的な比較ではなく、作品全体の中に関連箇所を位置づけつつ観察し、分析・検討する、というものであった。こうしたテキストの読解と分析・考察の作業を、韻文作品と散文作品とを問わずに進めることで、作品ごとの特色や当該ジャンルの伝統はもちろん、ある面では異なるジャンル間の相互関連の様相などの考察にも及ぶことにもなった。こうした本研究課題の遂行により、「引喩適合」という手法が具体的な形で実践されていることを一定の確実性をもって捉えることができたと考えている。それと同時に、特にヘレニズム以降の諸作品におけるこの手法の重要性と、そうした創作原理を意識化したヘレニズム詩学の重要性も改めて明らかになって来た。このことから、3年間の研究全体の総括に際しては、次の課題に向けての方向性を確認することも可能となり、新たな課題に基づく更なる研究の継続を図ることとした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 小池 登「シンポジウム「プルータルコスと指導者像」趣旨と総括」

『西洋古典学研究』64 (2016) pp. 89-91. 査読あり。

2. 大芝芳弘「ルクレティウスの序歌について」

『フィロロギカ』10 (2015) pp. 14-36. 査読あり。

3. 大芝芳弘(書評): Richard Tarrant, ed. *Virgil, Aeneid Book XII*. (Cambridge Greek and Latin Classics), Pp. x+363. Cambridge UP 2012.

『西洋古典学研究』63 (2015) pp.109-112. 査読なし。

〔学会発表〕(計2件)

1. 大芝芳弘「Horatius, Carm. 2.16 Otium divos」
フィロロギカ(古典文献学研究会)
第15回研究集会 2016年10月15日
成城大学

2. 小池登「アイスキュロス『ペルサイ』
93-101行について」
東京都立大学哲学会(第40回研究発表大会)2016年7月9日
首都大学東京国際交流会館

〔図書〕(計1件)

1. 小池和子、上野慎也、兼利琢也、小池登、小林薫(共著)
『伝サッルスティウス他 伝サッルスティウス関連小品集』(翻訳・注・解説)
慶応義塾大学言語文化研究所
2015, Pp. iii+131
(小池担当部分: pp. 17-33)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者
大芝芳弘(OSHIBA, Yoshihiro)
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号: 70185247

(2)研究分担者

小池登(KOIKE, Noboru)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号: 10507809

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし